

マーケット概況（2020年12月）

12月の債券相場は、日米の堅調な株式市場を背景に前月からの軟調地合いが継続し、10年360回債の利回りは0.025%で始まった。4日に発表された米国雇用統計は低調な内容となったが、追加経済対策に対する与野党合意期待の高まりを受けて米国10年債利回りが約8ヵ月半ぶりに0.980%まで上昇すると、7日に本邦債券先物12月限は一時151円88銭まで下落した。その後は、世界的な新型コロナウイルスの感染拡大懸念から債券相場は次第に強含みとなり、債券先物3月限は152円18銭まで上昇、15日には10年360回債の利回りが8月5日以来となる0.000%まで低下したが、米国で追加経済対策案が、英国とEU間では自由貿易協定がそれぞれ合意に至ったことから相場は再び売り優勢となり、債券先物は152円台を割り込んだ。20日に公表された2021年度の国債発行計画では40年債が年間6,000億円の増発となったが、事前の報道もあり、相場への影響は限定的となった。29日には日経平均株価が約30年ぶりにバブル景気後の最高値を更新したものの、年末を控えて債券相場はレンジ内での推移となり、10年360回債の利回りは前月末比1.0bp低下、昨年末比では4.5bp上昇の0.020%で2020年の取引を終えた。

<短国市場>

3M金利は、手厚い国庫短期証券買入オペと投資家需要を背景に、月後半にかけて需給環境が好転したことから低下した。4日・11日の3M入札はともに最高落札利回りが-0.0837%と横ばいで推移した。17日の3M961回債入札でも-0.08%台となったが、年明けまで入札がないことからその後は順調に消化され、セカンダリー市場では-0.103%で年内の取引を終えた。6M金利は3M金利に連動する形で-0.08%台～-0.10%台で推移した。1Y金利は一時-0.150%まで低下したが、14日実施の国庫短期証券買入オペで1Yゾーンの銘柄が対象外となったことから水準が修正され、16日の1Y960回債入札は-0.10%台に上昇し、その後のセカンダリー市場では-0.11%台で推移した。

<一般債市場>

10年政保債のスプレッドは国債カーブ+5.0bpと前回の9月債から0.5bp縮小した。10年地方債は同+9.0bpと前月比1.0bp縮小し、東京都債を除く地方債として5年4ヵ月ぶりに一桁のスプレッド水準で決定したものの、クーポンが0.1%台となったことが安心材料となり旺盛な需要が確認された。既発債も需給は安定しており、スプレッドは全般的に確りと推移していた。社債の発行額は、NTTファイナンスが4本立て計1兆円を起債したことが貢献し、2兆8,072億円と昨年9月(2兆7,170億円)を超え月次ベースで過去最高となった。東急不動産ホールディングスは国内初となるサステナビリティボンド形式の公募劣後債を起債し、ESG投資先や実質年限に対する利率の高さなどの条件が好感され、需要を集めた。

◎ 主要債券月間四本値 ◎

銘柄	始値	高値	安値	最終出来値
#360	0.025(1日)	0.000(15日)	0.025(1日)	0.020(30日)
#359	0.015(1日)	-0.015(15日)	0.015(1日)	0.005(30日)
#350	-0.085(2日)	-0.110(15日)	-0.080(3日)	-0.090(25日)
#145(5Y)	-0.105(1日)	-0.130(11日)	-0.105(1日)	-0.110(30日)
#174(20Y)	0.395(1日)	0.370(10日)	0.400(29日)	0.395(30日)
#954-#959TDB(6M)	-0.098(1日)	-0.107(18日)	-0.086(9日)	-0.091(21日)
#955-#961TDB(3M)	-0.090(1日)	-0.104(21日)	-0.084(8日)	-0.103(21日)